

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介 (47) 平成 14 年 5 月 15 日

幕末・明治初期の経済書 (その1)

## 神田孝平 / 訳 『経済小学』(K086/5)・(K086/6)

神田孝平 (1830~1897) は天保元 (1830) 年 9 月 15 日、美濃国不破郡岩手村 (今の岐阜県不破郡垂井町) に生まれました。17 歳のとき京都に出て、その後、嘉永 2 (1849) 年、江戸に移りました。この間、漢籍を学びましたが、嘉永 6 (1853) 年のペリー来航をきっかけに学問の方向を変え、杉田成卿、伊東玄朴、手塚律蔵らについて蘭学を学びました。手塚律蔵が江戸本郷元町に開塾した又新堂では西周、木戸孝允、杉亨二らと同門でした。

『経済小学』の原本は、イギリスの経済学者ウィリアム・エリス (William Ellis, 1800 - 1881) が初等教育の教科書として書いた『Outlines of Social Economy』(初版 1846 年) の第 2 版 (1850 年) です。この本は 1852 年に、オランダ語に訳されていますが、開成所教授職並であった神田孝平は、このオランダ語翻訳本から重訳し、慶応 3 (1867) 年に『経済小学』の初版を出版しました。西欧の経済学を日本に紹介した最初の訳書の 1 つと言えます。慶応 4 (1868) 年には、『西洋経済小学』と書名を変えて再版しています。

ウィリアム・エリスは、「海上保険王」と称されるように実業家として活躍した人物で、学問的には J.S. ミルとの親交があり、アダム・スミス、マルサス、リカード、そしてミルと続く古典派経済学に属します。古典派は、産業革命後のイギリス資本主義の発展を背景に、生産手段の私的所有と自由競争を原則とし、国家による規制・介入を排除する自由放任主義を主張する経済学です。彼は、また、経済学を学校教育に導入することに力を注ぎ、『経済小学』の原本である『Outlines of Social Economy』は、自らが設立したバークベック・スクール (Birkbeck School) の教材として使われました。

『経済小学』は上下二編で、その目録 (目次) は、次のようになっています。上編では、文明夷俗、國民性行、畜積財本、地代、雇直、利分、分業、交易、品位、金幣、紙幣、為替、物價昂低、下編では畜積財本、地代、雇直、利分、同業相助相迫、勸業、貧窮、外國交易、自在交易制限交易、器械、拓土移民、租税、直税、間税、通税別税、民間収入、消費、結尾が記されています。当時、日本語にはない経済用語や経済概念もあり、日本語訳に苦労している様子がうかがえます。上述の目録の中にも、財本 (現在の用語では資本) 雇直 (賃金) 利分 (利潤) 金幣 (貨幣) などの語が見られます。また、「品位」の節にある「是故二物品ノ位ノ昇降スル根元八種ナリト雖モ、首トシテ八各人ノ供給セント欲シ、求取セント欲スルニヨレリ」という記述の中には、位 (価値、価格) 求取 (需要) などの用語を見つけることができます。なお、これに続いて、交換価値や「市場ノ位」(市場価格)、「平均位」(自然価格) などについて、古典派経済学の基本的な考え方の紹介がなされています。

「外國交易」の節の冒頭で、「外國交易ハ分業ノ法ヲ世界万国ニ推シ廣ムルノ謂ナリ」と記し、貿易が国際分業であることを明示しています。さらに、貿易パターンの決定要因として「製作ノ費」(生産費) の差を指摘しています。そして、リカードの比較生産費説をふまえて自由貿易論を主張し、ミルの自国産業保護主義批判などの所説と類似した論を展開しています。開港により日本の経済環境は大きく変化しました。明治初期には、「自由貿易か、保護貿易か」の論争が繰り広げられましたが、『経済小学』で紹介された自由主義経済の思想は、論争に新たな論点を与えたと言えます。

現代の経済学のテキストは需要供給曲線をはじめさまざまな図を用いて、難解な理論を視覚的に具体的なイメージをもって理解できるように工夫されています。『経済小学』には図解が 1 つもありません。記述だけを頼りに、資本主義社会の土台がまだない日本で、「供給ノ数減シ、求取ノ数ヨリ少キニ至ラサレハ、其位復タ昇ラス・・・」などと考えることは、難しいことだったと想像されます。

### 【参考文献】

『ウィリアム・エリスの経済思想』(331.4 / 刊)

『福沢諭吉の経済思想』(331.2 / 173)